# 芸術教育文献解題３

山　口　喜　雄
渡　邊　　弘
石　野　健　二
茅　野　理　子
渡　辺　浩　行
中島宗晧（望）
田　和　真紀子
村　松　和　彦
株　田　昌　彦
山　田　有希子
本　田　悟　郎

宇都宮大学教育学部紀要
第64号　第１部　別刷
平成26年（2014）３月

# Bibliographical Notes 3 of the Literature about the Education through Art

YAMAGUCHI Nobuo, WATANABE Hiroshi, ISHINO Kenji,
CHINO Masako, WATANABE Hiroyuki, NAKAJIMA Nozomu,
TAWA Makiko, MURAMATSU Kazuhiko, KABUTA Masahiko,
YAMADA Yukiko, HONDA Goro

# 芸術教育文献解題３

## Bibliographical Notes 3 of the Literature about the Education through Art

山口　喜雄，渡邊　弘，石野　健二，茅野　理子
渡辺　浩行，中島　宗晧（望），田和真紀子，村松　和彦
株田　昌彦，山田有希子，本田　悟郎
YAMAGUCHI Nobuo，WATANABE Hiroshi，ISHINO Kenji，CHINO Masako
WATANABE Hiroyuki，NAKAJIMA Nozomu，TAWA Makiko
MURAMATSU Kazuhiko，KABUTA Masahiko，YAMADA Yukiko，HONDA Goro

### １　序：教育制度にも教育実践にも大切な「芸術の作用」

多領野教員による芸術教育文献解題の共同執筆は、全４回予定の３回目である。各回は「起承転結」を順に想定して各解題者は執筆し、今回の趣旨は「転」である。

日本における近代教育は、「人々自ラ其身ヲ立テ其産ヲ治メ…」ではじまる学制序文、正式名では1872（明治５）年８月２日公布の太政官布告第二百十四号「学事奨励に関する被仰出書（オオセイダサレショ）」の公布によって開始された。文部科学省学制百年史編集委員会によればその本質を、「立身・治産・昌（しょう）業のためには、人々すべてその身を修め、智（ち）を開き、才芸を長ずることが緊要」と記している。けれども、その実態は資本主義的生産様式の採用による先進国化であった。換言すれば、明治政府の「富国強兵、殖産興業」策の手段としての近代産業および近代軍備の振興という線上に教育制度が創設された。軍隊は戦闘により実効性が検証されざるを得ないので、近代化の矛盾が端的に集約されていた。そのため、技術面では徹底した科学的合理主義を採った。逆にその技術を駆使する主体者の形成には非科学的かつ非合理的な政策を推進したところに日本的な特殊性が認められる。[註(1)]この教育政策は1890（明治23）年発布の「教育ニ関スル勅語」（教育勅語）で強化され、第二次世界大戦の敗戦まで保持された。例えば、敗戦以前の図画は児童の思いやイメージの表現は全く重視されず、教科書に示された手本を真似て画一的に写し描かせる臨画であった。明治初年から昭和前期までの近代学校教育は児童生徒の「思想感情を統制」し、主体者を形成してこなかったといえる。

連合国軍総司令部（GHQ）は、1945（昭和20）年８月15日の日本敗戦を受け、軍国主義的超国家主義的教育の一掃へと転じた。翌1946年１月４日教育使節団を本国に要請し、２月18日には米国国務省は当時の先端的な教育専門家を組織した。３月31日発表の『米国教育使節団報告書』（第一次）には、「われわれは、征服者の精神を持って来朝したのではなく、すべての人間には、自由を求めさらに個人的ならびに社会的発展を求める測り知れない力がひそんでいることを確信する教育経験者として来朝したのである。しかし、われわれの最大の希望は子供にある。（後略）」との序論ではじまる。そして、新しい日本の教育制度を外圧からでなく自らつくり出すあり方を芸術家に準えて記した。

「（中略）われわれは、すべての種族、すべての国民が、何かしらそれ自身にとって、また全世界にとって役立つものを、その文化的資源から創り出す力を持っていることを信じている。これが自

由主義的信条である。われわれは画一ということを信奉するものではない。われわれは教育者として個人差や、創意や、自発性に対して絶えず心を配っている。これが民主主義の精神である。われわれはわが国の制度をうわべばかり真似たものを見せられて、よい気になったりはしない。進歩発達と社会進化を信ずればこそ、希望と生新な力の源として世界到るところに存在する、種々な文化を歓迎するのである。（中略）芸術家はその仕事のよろこびのために仕事をする、そして外部の力からではなく仕事そのものの与える制約から自己を修養するのである。何世紀もの間を通じて日本は、その神髄まで美の感覚にふれた文化を発展させてきたのである。（後略）」[註(2)]

芸術創作の姿が教育のあり方に照応するとの見方は、同『報告書』から67年を経た2013年現在も輝かしさを失っていない。内発的な「芸術の作用」に関連する芸術教育文献の記述や義務教育課程における多様な芸術教育実践に改めて注目したい。（山口喜雄）

## 2　芸術教育文献解題

### 2-1　解題『自由畫教育』

『自由畫教育』

著者名：山本鼎

出版社：黎明書房（復刻版）

出版年：1972年

山本鼎（かなえ）（愛知県岡崎出身、1882-1946）が1921（大正10）年に、当時の臨画教育を批判して興した自由画教育の要点や使命などその全容を319頁に情熱的に著した書籍である。

安っぽい印刷物を「お手本」にした臨画教育では子どもの「創造力」を育てられない。豊富な色と濃淡が豊かな自然こそ唯一の手本であり、「直覚的に、綜覚的に、或いは幻想的に自由に描かるべきである」という主張が基軸で、個性伸長の起点の書といえる。

小学校課程に選択教育で「繪畫（絵画）と彫塑」、手工科も小・中で選択、中学校は男女共に必修で「美術史大要」と工芸・創作版画・展覧会の所見等で現行の鑑賞と近似の「美術雑話」の必要、その授業を可能にする師範学校や美術学校市師範科での要請をも提案している。

教育者ではなく画家の鼎が、1916年夏のモスクワ滞在での異文化理解から自由画奨励と農民美術という使命を感じて帰国、1919年に長野県神川（かんがわ）小学校で第１回児童自由画展覧会開催など「日本に於ける自由畫教育運動」の章は、臨場感がある。

また、その授業実践者や学校名と状況が詳しく記され、「反對者に」という章は、『教育研究』や『中央公論』誌上での白濱徵・板倉賛治・阿部七五三吉らとの双方の激昂した声が聞こえそうである。「附録」のなかには、「君はどう？失戀しなかったかね」と青年に話しかけたやりとりに鼎の人柄も伺え、興味深い。現在は、黎明書房から復刻版（1972）が刊行されている。（山口喜雄）

### 2-2　解題『日本近代文学の起源』

あとがきに「『文学史』を批評するためだけに文学史的資料」を用いたとあるように、通説を根源的にとらえ直すという現象学的方法で、日本・近代・文学の「起源」の再考を図った四六判（127×188粍）で全220頁の文芸評論である。

『日本近代文学の起源』

著者名：柄谷行人（からたにこうじん、本名は柄谷善男：よしお）

出版社：講談社

出版年：1980年

六つの章それぞれに、各主題に焦点をあてた日本近代文学の巨匠が著した文学的資料がちりばめられ、文学を越えた多面的な論考と端正な文でその本質を射貫いている。夏目漱石の『文学論』ではじまる〈Ⅰ：風景の発見〉では、山水画という名称は描かれた時代にはなく、フェノロサ（E・F・Fenollosa）が命名し絵画の一分野に位置づけられたとし、「『山水画』において、画家は『もの』をみるのではなく、ある先験的な概念をみるのである」と明言する。「風景の発見」は、「あるねじれた、転倒した時間性において」在るということを東西の絵画や文学で例示し、本書を読む薄学の徒は既知の全てに疑いをもつ興味深さに引き込まれていく。

〈Ⅱ：内面の発見〉は前島密の建白による「言文一致」の運動、〈Ⅲ：告白という制度〉は二葉亭四迷の『浮雲』、〈Ⅳ：病という意味〉は徳冨蘆花の『不如帰』、〈Ⅴ：児童の発見〉は小川未明や鈴木三重吉、〈Ⅵ：構成力について〉にはマルクス（K・H・Marx）やフロイト（S・Freud）やヘーゲル（G・W・F・Hegel）とともに森鷗外の『阿部一族』などが居並ぶ。本書を通読すると、専門分野だけの狭い見識では、専門分野の研究さえも深めることができないことに気づかされる。（山口喜雄）

## 2-3　解題『私の個人主義―漱石講演集』

『私の個人主義―漱石講演集』

著者名：夏目漱石

出版社：グーテンベルク21

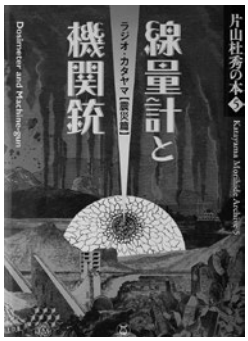
出版年：2011年

これは、1912年（大正３）11月25日、学習院において、漱石が講演したものである。この講演は、身近な事柄を糸口に、深い識見を盛り込み、やがて独創的な思想たる近代個人主義の考え方を論じたものである。

漱石の主張する個人主義とは、自他の個性を尊重しながら、その個性の発揮の裏に、堅固な義務が付随していなければならないというものである。また、個人主義は国家主義と矛盾するものではなく、国家が順調であれば、国家を意識しないですむし、そもそも四六時中国家のことを考えていなくてもよい。したがって、個人が個人を追求することが国家のためになると主張する。ただし、国家が逼迫してくれば、個人主義は、国家に妥協するよりないともいう。

また、個人のあるべき道徳に比べて、国家の道徳というのは、ずっと段が低いものに見えるとも指摘している。（渡邊弘）

## 2-4　解題『線量計と機関銃』




『線量計と機関銃』

著者名：片山杜秀

出版社：アルテスパブリッシング

出版年：2012年

変化が激しく、様々な情報が錯綜し、価値観の多様化の中にある現代社会において、純粋に音楽をするということははたして成り立つのであろうか。あるいは、どういう意味があるのかを、クラシック音楽の評論家の中で異色の存在である片山杜秀氏の著作を通して考えてみたい。氏は音楽評論家として「音盤考現学」「音盤博物誌」等の著作があり、また、政治思想史研究家として「未完のファシズム」では司馬遼太郎賞を受賞している。現在、音楽を多視点から見る必要性を痛切に感じており、氏の「線量計と機関銃」はまさにこれに適合している。この著作は衛星ラジオで放送中の番組「片山杜秀のパンドラの箱」から12回分を採録したものである。東日本大震災直後から書かれており、第二次世界大戦、ゴジラ、ナチス、チェルノブイリ、「セーラー服と機関銃」、小松左京等予測不能な角度から原発事故等によって生じた社会問題を取り上げている。大体において音楽は断片的な扱いであるが、後半では音楽の直面している切実な問題が取り上げられている。財政危機の中で切り捨てられつつある音楽関係の予算、そこには「お金の理屈と芸術の理屈」双方の主張があり、芸術側にも広い冷静な視野からの対応が求められている。情報がなんでも検索できるようになれば万事が解決するという世界観と、石油ショックのときにそれがなんの役にも立っていないということを対にした吉田秀和氏の文章の予見性にも言及している。（石野健二）

## 2-5　解題『グレン・グールド ――孤独なピアニストの心象風景――』

『グレン・グールド
――孤独なピアニストの心象風景――』

著者名：ジョルジュ・ルルー

訳者名：大西愛子

出版社：シンコーミュージック・エンターテイメント

出版年：2010年

20世紀を代表するピアニストの一人グレン・グールドは、1964年コンサート活動を止めた。クラシックの音楽家というものは、演奏会場抜きにその存在を考えることはできない。会場空間でのコミュニケーションこそクラシック音楽の本質であるが、これをグールドは放棄したのである。一種の引きこもりである。現代は電子化が極度に進展し、多くの人が閉ざされた空間の中で音楽と接触している。そういう意味でグールドの芸術と生き方は現代人における音楽のあり方の探求に多くの示唆を与える。

グールドはコンサートホールから逃げ出すと、２つのことを同時に追求し始めた。１つは演奏の完璧さの追及で、もう１つは彼が到達したことをあらゆる形で伝達することである。伝達とは録音のことであり、また、ラジオ・テレビ等でもある。スタジオという閉ざされた空間の中で、コンサートを特徴づける不均整を離れ、自分の演奏を贈る相手の平等性を強化する。また、孤独の価値

については、芸術家は完全な孤独の中で仕事をすることができ、理想の演奏を求める努力の全てが作品にこめられるとしている。「理論上かつてないほどの多くの聴衆に届けられるはずの音楽は、実際には際限ない個別の鑑賞につながる。」それは孤独者の共同体と言うべきもので、グールドが彼らに音楽を聴くように呼びかける時、彼らは鑑賞空間の介在なしに彼の音楽を受け取ることができるのだ。（石野健二）

## 2-6　解題『芸十夜』

『芸十夜』

著者名：坂東三津五郎・武智鉄二

出版社：駸々堂（2010年に雄山閣から復刻版が出版）

出版年：1972年

本書は、八代目三津五郎と武智が実際に師事した、伝統芸に携わる名人達の芸談を綴った対談集である。能、歌舞伎、狂言、文楽、義太夫など、その極めるものは違っても同じ「藝」という道に向かう厳しさ、一途さは、言わば生き方そのものが「藝」だという気さえして感動的である。そして、その精進の一結果である技芸及び眼識の高さが、魅力的な逸話となって語られる。例えば、七代目三津五郎に、どうやったって追いつかない先人の芸に近づこうとするのが芸の修業だと言われ、鬱積した気分を抱いていた少年時代の八代目に、宝生流職分の松本長が言った言葉、「どんな偉い名人だって、どっか忘れものしてるよ。それを探すんだよ。それでそこだけをうんと勉強して、ここだけは師匠より一歩先へ出たッと」。その思い出を語って、晩年の八代目は、「だけどほかを全部拾えた人でなきゃ、落としものには気がつかない」と続けている。武智の「なんでもなくやれることを、なんでもなくやれないようにして、そのなんでもなくやれないところから、なんでもなくやれるところをつかむというところが、伝統芸術の根本」という言葉は禅問答のようでいて含蓄がある。いみじくも、七代目三津五郎が「自分の芸の力以上のものは容易にわからない」（『舞踊藝話』）と言っているが、芸に知識のない者にも修業や道を極めるという生き方について、朧気ながらに何かを感じさせるものがここにはある。　（茅野理子）

## 2－7　解題『ワークショップと学び１ ―まなびを学ぶ― 』

『ワークショップと学び１ ―まなびを学ぶ― 』

編　者：苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎

出版社：東京大学出版社

出版年：2012年

本書の第５章「アートの公共空間をひらく－プラグマティズムの学びへ－」（pp.197-223）の中で、著者上野正道はデューイが憂慮したこととして、「人びとのアートの経験が貧困化していく事態」（p.203）を挙げている。そして、それは以下の３つの位相における二項対立的分裂において確認できるとしている。

「第一は、アートの経験が制作と鑑賞、生産と享受、観るものと観られる

ものといった二項対立に分離し、人びとの生活世界やコミュニティから切り離されていくことである」(pp.203-204)、「第二は、高級芸術とポピュラー芸術との間に引きかれた対立である」(p.205)、「第三の分裂は、アートと社会生活との間に引かれた二項対立である」(p.208)。

この「アート経験の貧困化」のせいか、アートを身近に感ずることができない自分がいたのだが、ここ数年、附属幼稚園長として関わった園児、附属小中学校や特別支援学校の児童や生徒のおかげで、楽しく愉快で、美しいものとしてアートとらえる（とらえなおせる）ようになってきた。

なぜだろう。

おそらく、園児、児童、生徒たちが「二項対立」の呪縛（？）から私を解き放ってくれたからであろう。それは、アートに対する私自身のunlearn（学びほぐし）であった。

本書の編者たちは、「私たちは多くを「学んで（〝学習〟して）」きているが、そのなかのかなりは「学びほぐす」必要があるのではないだろうか」（ⅰ）と問いかけている。その通りだと思う。（渡辺 浩行）

## 2-8　解題『日本の七十二候を楽しむ－旧暦のある暮らし－』

『日本の七十二候を楽しむ
―旧暦のある暮らし―』

編著者：白井明大　有賀一広

出版社：東邦出版

出版年：2012年

よく「日本には四季がある。」というが、四季があるのは日本だけに限らない。ただ、日本ほど気候変動の激しい地域は少なく、日本は春夏秋冬が明瞭に現れるといってよい。そして日本には春夏秋冬を二十四の節気に分け、さらに七十二の季節に分けて『候』と呼ぶ時代があった。

旧暦から新暦へと移り変わった今でも旧暦の暮らしに親しみを持つ人は多く、なかでも食の文化は世界でも群を抜いているのではなかろうか。和食は四季折々の食材を使いバリエーションも豊富である。もちろん他国にも豊かな四季はあるが、日本ほど四季に寄り添う国は他にないであろう。

ともあれ、日本人は四季を敏感に察知し、日常生活に反映させている。個人性を競う今のゲイジュツとは異なり、日常に触れることのできる身近な美にこそ「健やかさ」が保たれている。そして本書は、日常を親しみやすく楽しむ術を教えてくれる。季節に因んだ言葉や年中行事などを分かりやすく解説する。

そもそも七十二候（しちじゅうにこう）とは、古代中国で考案されるが、今は主に明治７年の「略本暦」に掲載された七十二候が使われる。めぐりくる季節や自然を楽しむ暮らしのなかには数え切れないほどの美が存在し、日本には自然と調和する文化藝術が多く発達した。旧暦は心で感じる季節であり、それが多くの美を産んできたのであるから、改めて姿勢を正して眺めてみる価値は大きい。ロウソクの灯で金屏風を眺めてみるがごとくに。（中島宗晧）

## 2-9　解題『和文化―日本の伝統を体感するQA事典』

我が国の伝統文化は危機に瀕している。それは後継者問題ばかりか、伝統そのものへの価値・関

『和文化
―日本の伝統を体感するQA事典』
編集者：中村　哲
出版社：明治図書
出版年：2004年

心の希薄化、あるいは地球温暖化による材料不足に至るまで、実に様様な要因が混在している。

また、あらゆるモノが複雑に入り組んだ現代日本のなかで、歴史も担い手も異なる多種多彩なジャンルを安易に分析すべきでないにしても、伝統文化が今、現代社会にどれだけ受け入れられ、どのような支援が行われているのか。また、未来社会への継承には一体何が必要なのかを客観的に捉えておく必要はあるだろう。

本書は、我が国の伝統文化に関する価値・歴史・技法（体感）などをＱ＆Ａの形式で解説している。何よりその質問自体が本質を捉え、新たな関心を誘発している。日本の伝統と文化に興味を持つ者には入門テキストとして推奨する。残念ながら、一部解説には誤解を招かねない表現も見られるが、もとより事典とは断片的な手がかりに過ぎない。

さて、「誘発」といえば、日本の伝統文化の危機は「日本人らしさ（精神）の消失」をも誘発している。日本の伝統文化は、日本人の心の支えであり、日本人の教養（リベラルアーツ）の基盤を培うものである。さらにいえば、日本の伝統文化は、我が国の発展と世界との共栄に貢献する基本理念でもある。この歴史的にも日本人にはかけがえのない情緒思考文化をただ文化遺産にとどめておくべきではない。日本、そして世界の生きた資産として、今こそ機能させねばならないのである。（中島宗晧）

## ２－10　解題『ピアノのおけいこここがポイント』

『ピアノのおけいこここがポイント』
編集者：天池真佐雄
出版社：音楽之友社
出版年：1976年

自身の転換点をどこに見るかは別として、きっかけはいつも周辺分野、異分野にあった。茶道や華道といった藝道が「お稽古事」として広まるなか、そもそも実用に発した書道が特殊技能として扱われるようになったのは、筆記用具が毛筆から硬筆へと移行してからである。毛筆で書くことが日常であった時代とそうでない今とでは教育の意義も目的も大きく変わったのである。

本書は学生時代に古書店で見つけた一冊である。書写における毛筆技術の指導が当時のテーマであったことから、バイエルへの批判に真っ向から反論した著者の一文「技術とは弾くことじゃないか」には勇気づけられた。

技術中心主義と揶揄された教則本『バイエル』も、いわゆる「お習字」も、もとより技術を教えることが意義であり目的である。「子供らしさ」という観点で評価する旧態依然とした「お習字」世界を批判・分析・提案し続けるきっかけになった出会いの一冊であることは間違いない。

なお、これに類する本は数多く、手元にあるだけ並べてみた。渡辺由記子『魔法のピアノレッスン』（株式会社ヤマハミュージックメディア、2013）、安田寛『バイエルの謎』（音楽之友社。2012）、横山幸雄『ピアノ136Q&A上・下』（株式会社ショパン、2003）、江口寿子、夏目かおる『ピアノレッスンQ&A』（全音楽譜出版社、2000）、大村典子『ヤル気を引き出すピアノのレッスン』（音楽之友社　1982）と、遡るほど著者の個性が出ている。楽譜の語を手本に、ピアノを毛筆に置き換えて読むことができる。（中島宗晧）

## 2-11　解題『花の四季』

『花の四季』
著　者：松尾敏夫
出版社：日本放送協会出版
出版年：1981年

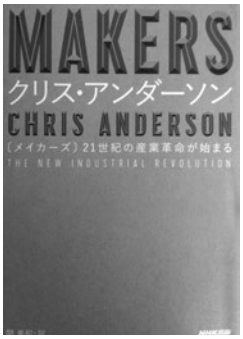
この本は、日本画家・松尾氏が『趣味の園芸』で連載していた表紙絵とエッセイを組み合わせた画文集である。解題者は80年代に愛読していた『趣味の園芸』の表紙で松尾氏を知り、存在感ある季節の花の表紙と、短くても印象深いことばで綴られたエッセイとを毎号楽しみにしていた。

著者の松尾氏は、美術学校や美術系大学の出身ではなく、雑誌に載っていた絵の写真―夕顔の花を描いた作品―に強い感銘を受け、その作者である堅山南風の元に弟子入りし、日本画の研鑽を積んだ。今日、教育と学校はほぼ一体であり、何かを学ぶためには、まず学校を選ぶのが一般的である。しかし、この松尾氏の回想的エッセイで、感動した仕事（作品や研究）に出会いその作者の弟子になるという学び方もあることを知り、幼いながらもそれが強く印象に残った。

後年、解題者が日本語学の研究者を志すにあたって大学院を選ぶ時に、ふとこのエッセイのことが頭をよぎった。松尾氏が堅山氏に弟子入りした時のように、研究書を読んでもっとも感銘を受けた研究者に師事しようと考えた。そうやって選んだ師が今夏急逝された小林賢次先生（東京都立大学名誉教授）であった。誠実で地道な研究の積み重ねによって日本語の変遷をダイナミックに描き出すという小林先生の研究スタイルは、研鑽を重ねる松尾氏の画業とも相通ずるものがあった。解題者はこの美しい画文集に、学び方と師の見つけ方を教わっていたのだと思う。（田和真紀子）

## 2-12　解題『MAKERS』

「〔メイカーズ〕21世紀の産業革命が始まる」というサブタイトルが冠された本書の著者は、現「ワイアード」US版編集長である。彼は新産業革命・メイカームーブメントの、これまでの10年を総括し、これからの起こりえる10年について述べている。世界を変えたデジタル、ビットの世界から、現実のアトムの世界へ、デジタル・ファブリケーションこそが21世紀の産業革命の始まりであり、21世紀の産業構造は20世紀のそれとまったく違うものになると予想している。メイカームーブメントについて、アンダーソンは次の大きな３つの特徴を挙げている。１つ目は、「デスクトップのデジタル工作機械を使って、モノをデザインし、試作すること（デジタルDIY）」。２つ目は、「それらのデザインをオンラインのコミュニティで当たり前に共有し、仲間と協力すること。」３つ




『MAKERS』

著者名：クリス・アンダーソン

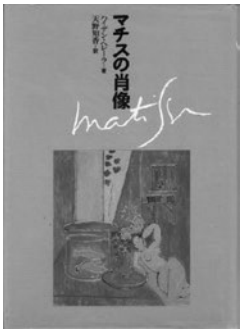
訳者名：関　美和

出版社：NHK出版

出版年：2013年

目は、「デザインファイルは標準化されたこと。おかげでだれでも自分のデザインを製造業者に送り、欲しい数だけ作ってもらうことができる。また自宅でも、家庭用のツールで手軽に製造できる。これが発案から起業への道のりを劇的に縮めた。まさに、ソフトウェア、情報、コンテンツの分野でウェブが果たしたのと同じことがここで起きている。」（以上p32）である。こうしたメイカームーブメントがもたらすビットとアトムの融合した世界に子供たちが生きることへの理解は、教育に携わる者にとって必須であろう。是非一読をお勧めしたい。（村松 和彦）

## 2-13　解題『マチスの肖像』




『マチスの肖像』

著者名：ハイデン・ヘレーラ

出版社：青土社

出版年：1997年

20世紀を代表する画家アンリ・マチス（Henri Matisse1869～1954）の生涯を作品様式の変遷と共に描いた著書である。本書の特徴はそれら作品の解説と合わせてマチスの個人的な逸話を取り上げ、人間性にも目を向けている点にある。

フランス北部のピカルディーで生まれたマチスは一時、父の勧めにより法律家の道を目指すが、母から気晴らしにと送られた絵具箱をきっかけに画家になることを志すようになる。

パリの美術学校でのギュスターヴ・モローやセザンヌ作品との出会い、印象派の画家であるピサロやシニャックとの交流を通して、フォービスムを確立していった。

1908年に書かれた手記である「画家のノート」の中でマチスは、「風景の一瞬の眺め」だけではなく、「本質的な性格」を表現したいと述べており、それを体現するように「ダンスⅠ」を描いた。この作品は田舎で見た踊りの思い出に基づいて描かれ、ムーラン・ド・ギャレットでファランドールを見た直後に制作したとされている。

晩年のマチスは大病を乗り越えたが、自由に動けなくなった。これを機に切り紙絵の制作が増えていく。この切り紙絵について「色彩の中を直に切り抜いて行くのは彫刻家が石を彫る作業を思わせる」と述べており、平面的な切り紙絵の形態にボリュームの感覚を付与している。

その他、影響を与えた人物、風景、作品は多々紹介されており、二度の世界大戦を経験しても画家としての活動を続けたマチスの肖像をまさに本書は示している。（株田昌彦）

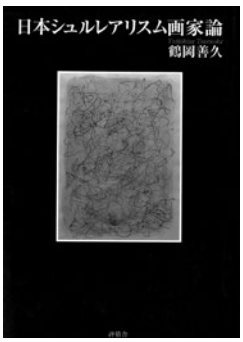
## 2-14　解題『崇高と美の観念の起原』

『フランス革命の省察』（1790年）他、多くの政治的著作を残したイギリスの政治家バーク（1729

『崇高と美の観念の起原』
著者名：エドマンド・バーク
訳者名：中野好之
出版社：みすず書房
出版年：2011年

—97）の作品。彼の文壇デビューきっかけとなった著作であり、唯一の美学論でもある（1757年春に匿名で公刊）。その美学論は、レッシング、メンデルスゾーン、シラーに影響を与えたと言われる。さらに、西洋初の本格的美学論とされる『判断力批判』においてカントは、本書の心理学的・生理学的な分析方法を批判するものの、具体的で経験的な人間学的考察の素材としての価値を評価してもいる。本書第三部で「美」は「物体に備わっていて我々に愛もしくはそれに似た情念を生み出す…性質」と定義されており、「均斉」「適合性」「完全性」等の古典主義的な「美」の規定が否定され、新たに「小ささ」「滑らかさ」「斬新的変化」「繊細さ」等の独自の「美」の特質が挙げられる。また「美」と「崇高」とが区別され、人間一般に共通する「苦痛」と「快楽」、「自己保存」と「社会性」といった人間本能との関係からそれらが分析される。そして、人間の「自己保存」の本能に関わる「恐怖」（苦痛と危険という観念をかき立てるもの）が「崇高」の源泉であるため、「美」よりも「崇高」の方が人間にとって切実な感情であると分析する。バーク独特の美学は、それまでの古典主義的「美」論へのアンチテーゼとして、ロマン主義的美学の先駆けとも解釈される。（山田有希子）

## ２－15　解題『日本シュルレアリスム画家論』




『日本シュルレアリスム画家論』
著者名：鶴岡 善久
出版社：沖積舎
出版年：2006年

詩人で美術評論家の鶴岡善久（1936－）は、「薔薇祭」「蜃気楼の旅」などの詩作の他、美術史研究において重要な著作を世に送り出している。それらは、戦前から戦後の日本の前衛芸術について、自らの体感を拠り所としながらも、精緻な美術史考証として詳述されたものである。『危機と飛翔』（1996）では、土方巽、大野一雄らの舞踏論、日本における超現実主義、また、その動向に深く関わった瀧口修造や北園克衛らの詩作を検証し前衛の精神を捉えている。

その後、本書『日本シュルレアリスム画家論』においては、古賀春江、北脇昇、三岸好太郎、福沢一郎、米倉寿仁、飯田操朗、阿部展也、靉光ら15名の画家を採り上げ、さらに、日本のシュルレアリスムの展開における瀧口修造の果たした役割に焦点をあてている。本書では、戦前の理論探究と戦後の実験的なデカルコマニーの発表とに分けて、瀧口の立場が実証的に記述されている。それは、本国フランスのシュルレアリスムが、瀧口らを介して、どのように日本に受容されたかを導くものである。

本書は、近代以降の日本美術史の多様な展開における日本のシュルレアリスムの特質を理解する上での重要な文献のひとつである。日本のシュルレアリスムが辿り着いた深淵を照らし出すのであ

る。日本のシュルレアリスムは、本国と同様に詩と絵画の領域を通底する新たな芸術論に支えられ、尚且つ、東洋的な美の精神をも反映させ、受容から日本化への展開が試みられたと言えよう。（本田悟郎）

### 2-16　解題『新版 文学とは何か―現代批評理論への招待』

『新版　文学とは何か
―現代批評理論への招待』

著者名：テリー・イーグルトン

訳者名：大橋洋一

出版社：岩波書店

出版年：1997年

本書は、「文学とは何か」を解き明かし、定義づけるものではない。読者を文学批評の入り口に誘い出し、「文学」を考えるための動因を多くの読者に与えるのみである。

各章は「英文学批評の誕生」「現象学、解釈学、受容理論」「構造主義と記号論」「ポスト構造主義」「精神分析批評」「政治的批評」で構成され、現代の哲学・思想の展開を解りやすく提示している。そして、それぞれの理論が、文学批評の手法として有効であることが明らかとなる。

本書は“Literary Theory”の第二版（1996年）の訳書である。第一版は1983年に出版されているが、本書には冒頭に著者の言葉として「新版のはしがき」が加えられている。そこで、著者であるイギリスの文芸・哲学者テリー・イーグルトン（Terry Eagleton、1943年～）は、次のように記している。

「じっさいのところ、文学だけから発生したり、文学にしか適用できないような理論の総体という意味での文学理論など存在しないのだから。本書で概略を示した批評方法は、現象学的批評や記号論から、構造主義や精神分析批評に至るまで、どれをとっても文学的書き物だけに関係するものはひとつもない。それどころか、こうした批評方法は、どれも人文学の他の分野から生まれ、文学そのものに限定されることのない大きな可能性をもっている。」

文学における読者、美術における鑑賞者、両者を想定した受容理論のように、本書からは芸術諸領域を横断的に捉えるための理論体系を見取ることができよう。（本田悟郎）

## 3　あとがき

本稿巻頭に記した『米国教育使節団報告書』以降に日本の学校教育は何を形成したのであろうか。

筆者は2013年度現在で教職40年目である。ちなみに、横浜市立中学校３校の19年間に生徒8000名余、筑波大学附属小学校に４年半で児童1000名余、以後は宇都宮大学にて16年半で学生2000名余に授業で接し、宇都宮大学教育学部附属小学校で校長兼務の３年間に児童1000名余と接した。総務省統計局発表による2011年10月１日現在の日本の総人口は１億2779万９千人で、筆者は総人口の約１万分の一の児童・生徒・学生に直に接してきた計算になる。1000名を越える大規模校３校で中学生と接した時期は、いじめや対教師を含む「校内暴力」の渦中にあり、辛苦の年度が２校合わせて６回続いた。なかでも1980年代中期に勤務した中学校は最悪の状況であった。中学校３学年所属18名の中で、授業を正常に行えたのは美術の筆者と理科専門の生徒指導専任との二人のみ、全校約40名の教員の約三分の二が暴力被害を受け、「不登校」教師がでるほどであった。筆者は1992年度に教務副主任と２学年副主任を兼務しつつ、学年教員と一丸となって問題行動生徒ゼ

ロの学年づくりに成功した。辛苦の学校状況下での教育実践を支えたのは、1974年中学校初任以降の先輩教師たちから学んだ意識的な教育活動、1985年に入学した横浜国立大学大学院での学習、そして以後の研究活動であったと明言できる。それらの体験に基づいて問題行動が多発する中学校での美術教育実践を総括して美術科教育学会で口頭発表と論文[註(3)]を執筆し、日本の学校教育がつくり出した問題点に関する論考を著作した。[註(4)]

さて、現代日本における学校教育が形成した問題点とは、学習者の主体性欠如に関連している。それは、「『答え』に合わせようとする知覚習慣」、「表と裏の成績主義」、「授業内欠席」の三つである。

（1）一般に、感覚器官を通して外部の事象を判別し意識することを「知覚」という。また、心理学では刺激と反応との系列の反復により獲得された刺激と反応の自動的な連合を「習慣」という。受験競争が後年の生活を左右するとの認識から大学入試センター試験を頂点に、有名附属小学校入学をめざすなら幼児期から、既に用意された「『答え』に合わせようとする知覚習慣」を形成し強化され続ける。これに対し図画工作は自分らしいイメージの表出、中学校美術は表現意図つまり「答え」を自ら表現する学習になり、歴史的な転換を行って半世紀以上を経ている。

（2）「表の成績主義」とは成績に関係する場合は意欲的に学習や活動に取り組み、「裏の成績主義」は成績に影響しない場合は学習も活動も行わないという行動の仕方をいう。「表と裏の成績主義」は、豊かな人間形成を目標とする学校教育の本質とは相容れない。

（3）問題行動多発中学校では授業開始後に教室に入らず多数の生徒が彷徨するので、授業担当のない教師が教室へ導く。入室後も居眠り、漫画や雑誌を読みふけり、授業に無関係な私語や手悪戯をする。教室に居ても当該授業への関心がなく取り組まないことを「授業内欠席」という。これは、質的に異なるが教員養成学部生にも見受けられ、授業者にとって大きな課題となっている。

こうした状態を脱するためには、学習者の側から見て自分の現在と将来に関連した学習内容であることが理解でき、毎回の授業が興味深い連続となり、自己能力の発達が自覚できる授業を創造することが求められていると考える。その一助として『芸術教育文献解題ブックレット』が活用されることを祈念している。また、教員養成学部での学校現場経験のある教員比率の向上という方針を文部科学省が提起した。その実行が希薄な学校現場経験ではなく、現代的な「辛苦の学校状況」を実感でき、学校と大学の教師相互の共感が生じる「経験」となるよう切望する。（山口喜雄）

## 註

（1）山口喜雄「開港文化第三世代・西松團三の美術教育」（『藝術教育學第４号』筑波大学芸術学系芸術教育学研究室編、1992、pp.133-150）

（2）教科教科百年史編集委員会編『原点対訳　米国教育使節団報告書』建帛社、1985、pp.11-15

（3）山口喜雄「問題行動多発中学校における美術教育」（『美術教育学』第10号、美術科教育学会、1989、pp.163-173）

（4）宮脇理・山口喜雄・山木朝彦『〈感性による教育〉の潮流　－教育パラダイムの転換』国土社、1993、pp.111～153

## 付記

（1）「芸術教育文献解題３」は、研究代表者、山口喜雄の企画・発案による。

（２）本論の編集は、本田悟郎が行った。本論の執筆者は、文頭に記載のとおりである。

（３）各解題の執筆者名は、解題ごとに文末に記載した。

（４）解題にあたった文献の名称、著者名、出版社、出版年等は、それぞれ文中の図版に添えて記載した。